

平成 19 年 4 月 29 日

## 第 50 回日本ばら切花品評会審査講評

審査長 土井元章（信州大学農学部）

### 1. 審査経過

日本ばら切花協会主催の第 50 回日本ばら切花品評会は、3 年ぶりに大阪に戻り高島屋大阪店 7 階催事場を会場として、平成 19 年 4 月 17 日から 4 月 20 日までの 4 日間開催された。4 月 17 日には全国から出展された 483 点の切花の受付・搬入を行い、翌 18 日 10 時から一般公開し、20 日には展示切花の販売を行った。出展は昨年より 26 点増加した。また、引き続き 21 日から 23 日には、品種展示とインフィオラータが行われた。品評会の審査は一般公開に先立ち 4 月 18 日 8 時から 10 時までの 2 時間をかけて行い、11 名の審査員により各賞を選考した。担当県である三重県をはじめ、滋賀県、奈良県、京都府の普及所や JA 関係者が審査の補助役を務め、選考された切り花の移動や賞の表示等のお手伝いをいただき、スムーズに審査を進めることができた。審査員は、審査長の土井元章（信州大学農学部）、副審査長の山内達也（三重県中央農業改良普及センター）をはじめ、試験研究・普及機関から 4 名、花き卸売市場から 3 名、小売商組合等から 3 名、フラワーデザイナー協会から 1 名の代表で構成されている。スタンダードが全体の 3/4、スプレーが 1/4 の比率にはあまり変化はなく、スプレーでは中大輪が、スタンダードでも大輪や中大輪の割合が増加している。ただし、品評会では通常のスタンダード品種が大輪のスタンダード品種と比較して見劣りすることから、出品が控えられているのではと思われることもない。本年の暖冬に続く春先の低温が品質や収量にどのように影響したかは明らかではないが、重油価格高騰の折、暖冬は生産者には有り難かったに違いない。

本年度は審査時間が限られていたこともあり、昨年度に行った審査員奨励賞の選考は行わなかった。優良賞の選考では、それぞれの分野の審査員が入るよう 3 グループに分けて、スタンダードにスプレーや特殊な花形のものを混ぜて各グループでおおむね審査点数の 25% を優良賞として選び出した。結果スプレー 44 点、スタンダード 76 点、計 120 点の優良賞を選考した。選考にあたっては、出展基準が守られているかどうかを確認した上で、葉と花の色やバランスが良好で、いたみや花卉のシミがないといった高い栽培・流通技術によって出展された商品価値の高い切花であることは勿論のこと、消費に適合する条件を具備していることを重要視して選考した。優良賞より各審査員のグループから 10～15 点ずつを選び、順位をつけ、3 グループを集めて計 29 点の優秀賞を選定し、さらに審査員全員で農林水産大臣賞、生産局長賞、近畿農政局長賞をはじめとする各特別賞を擬賞した。ただし、審査講評の会では、審査員の立場により評価基準が異なることから、栽培技術を重視する試験研究・普及機関、品種や商品性を重視する卸売市場、使い勝手やデザイン性を重視する小売やデザイナーの意見の相違が露呈し、特に辻春江審査員からは、フラワーデザイナーとしてみた時に柔らかさのあるおもしろそうな出品が評価されず、優良賞に選ばれるのががっかりと直立して花の大きいものばかりであるとの指摘を受けた。これは審査グループを混成として 3 グループで審査したことも一因で、より完成度の高い品種の商品としての評価、特に切花のボリュームが選考の際優先されたことによるように思える。今後は審査員それぞれの立場から、育種的に興味もたれる、栽培技術が優れている、今後有望と

思われる、販売しやすい、使い勝手がよいといった個々の視点で優良賞・優秀賞を選考するのも一つの解決策であろう。

また、一般展示とともに会場を訪れた消費者 340 人に投票を行ってもらい、お客様奨励賞 32 点を選出しているが、優良賞・優秀賞とは必ずしも合致せず、優秀賞との合致は 9 点にしか過ぎない。お客様奨励賞では、16 票を獲得しているピンクのスプレーであるモンローⅡを除くと、緑、青、茶といった品種が上位を占め、珍しい花色に来場者の興味が向いていると思われる。

## 2. 審査講評

今回農林水産大臣賞には、全審査員の同意のもとピンクの大輪スプレーである‘フェアリーテール’（佐賀県・原高繁氏出品）を擬賞した。これで 10 本かと思うぐらいボリュームには申し分なく、葉と花のバランス、咲き揃いもよくすばらしい仕上がりであった。花色、花形ともまさに“バラ”といったところである。生産局長賞にはピンクのスタンダード‘マイガール’（奈良県・巳波元二氏出品）を、近畿農政局賞には赤のスタンダード‘ローテローゼ’（栃木県・岡田隆一氏出品）を擬賞した。ピンクの大輪スタンダードは巨大輪や覆輪の品種を含めて多数出品されていたが、生産局長賞の‘マイガール’はショッキングピンクの中大輪品種で、揃いやバランスが良好で、きちんと開花が望めそうなところが特に優れていたといえよう。一方、赤のスタンダード品種に占める‘ローテローゼ’の割合は年々減少しつつあるが、近畿農政局賞の‘ローテローゼ’は花も十分に大きく、花色も鮮明で黒ずみがなかった点が評価された。難を言えば葉がやや大きい、これは品種特性として致し方ないところである。この‘ローテローゼ’以外の赤のスタンダード品種としては、‘ロレックス’や‘オスカーシャイン’が優秀賞に選出されている。

上記 3 賞以外に、三重県知事賞、三重県議会議長賞以下合計で 29 の優秀（特別）賞を選考した。優秀賞には滋賀県からの出品が 5 点と最も多かったが、内 4 点が杉本重幸氏（現会長）と國枝武夫氏の出品であり、ベテラン健在は喜ばしいことであるが、今後彼らに続く若手の奮闘を期待したい。

全体として‘ローテローゼ’、‘ノブレス’、‘テレサ’、‘ティネケ’等の主力スタンダード品種の出品点数が徐々に減少傾向にあり、かわって大輪のスタンダードが増加している。ただし、優秀賞には巨大輪の品種はほとんど選出されず、棄数が多い巨大輪はきちんと開花するかどうかに不安が残るとの指摘が生花商の審査員からあったことから、また大衆消費には必ずしも適合しないという点からも、評価が一段下がってしまったのではないと思われる。また、‘ラ・カンパネラ’やラナンキュラ系統に代表される変わり咲きの出品が何点もあり、多様性や目新しさといった要素が育種に反映されていることがうかがえる。今回はイングリッシュローズの出品がほとんどなかったのは残念であったが、これらのオールドローズから芳香性を導入した品種が何点か出品されており、香りの育種も着々と進んでいることがうかがわれた。

## 3. 審査員の意見

審査終了後、審査員全員で審査講評を行い、その中で以下のような意見が出された。まず、第 50 回という節目の品評会が開催されたことに対して日本ばら切花協会に審査員一同敬意を表したい。

全体として、今回の出品は消費の多様化を反映して花色や花形が豊富で、バリエーションに富む出展の品評会であった。個性的な品種が出展されたのも特徴的である。ただし、一部でうどんこ病や葉害の発生、葉

剤斑が残っているもの、結束がうまくいっていないものがあり、また後処理剤を使用しているにも関わらず水があがっていない切花があった。会場のライティングの関係で花色がうまく判定できないなどの問題点が指摘された。バケット輸送の普及とともに切り前が緩くなっているのではないかと指摘もあり、同じ品種でも切り前が異なると比較が難しい。また、変わり咲きの品種の審査は特に判断が難しく、今回はあまり優秀賞には選出されなかった。一方、スタンダードの定番品種の出展はそれなりの点数があったものの、見慣れてしまったせいか‘ティネケ’等ではなかなか優良賞にすら選ばれなかった。そのようななかで、‘テレサ’は地味ながらも健闘している。卸売市場協会の審査員から、安心してバラを買ってもらうには、定番品種をきちんと持つことが重要であるとの指摘があった。現状、赤の‘ローテローゼ’やピンクの‘ノブレス’から新しい定番品種が模索されているが、なかなかそれに代わるものがないといったところである。生花商の審査員からは、大輪バラについての意見が多く出た。まず、ホームユースにはあまり向かない上、弁数が多い巨大輪は開花しにくいとの指摘を受けた。消費をリピートしてもらうには、最後まで開花することが必須であり、大きい以外何を主張するのかといった厳しい指摘すらあった。今後品種適性にあった切り前を工夫するとともに、後処理剤の使用が大輪バラには強く求められるところである。

一方、フラワーデザイナーの審査員からは、フラワーデザインに適したものという視点からは、剛直でまっすぐなものは受け入れにくいとの指摘があり、審査の基準がボリュームや花の大きさといったどちらかという市場や生産者の視点が重視されてきていることを反省させられる意見であった。本来日本人の感性は、風が吹いて揺れないようなしなやかでない花を美しいとは感じないのではないだろうか。

審査講評に引き続いて、協会会員も交えて意見交換を行った。日持ちとの関係で、生産段階での湿度管理が重要であることが指摘され、重油価格の高騰を受けてヒートポンプ式の電気暖房機の導入が進んでおり、除湿や夜冷が可能になりつつあることが紹介された。また、土耕栽培で肥料ストレスや水ストレスにより日持ち性を高める工夫がなされているとのことである。一方、生産者からは小売店で後処理剤を確実に使ってもらえるのかという質問があり、現状では小売店によりまちまちであるが意識は使う方向に変わりつつあるとの返答であった。育種の立場からは、香りがあっても日持ちが得られる品種が育成されてきていることが紹介された。最後に、関東と関西での嗜好の違いといった点に話が及んだ。これは審査員も生産者も皆漠然と感じていることではあるが、いったいどのように違うのか、また何が原因で違いが生まれるのかといったことは明確ではなく、商品のターゲットを明確にする上でも今後具体的に明らかにしていく必要がある。

バラ切り花は、オランダに加え、インド、韓国、エクアドルといった諸外国からの輸入が増加傾向にある。そのような中で、国内産の切り花のよさをどのように主張していくべきか、またそのような主張ができるバラをいかにつくって消費者に届けるか、生産者のみならず卸売市場や小売店の力が試されているときである。

#### 4. 審査結果

厳正な審査の結果、特別賞 29 点、優良賞 120 点を選出し疑賞しましたので、これらに基づいて表彰されま  
すようお願いして審査報告といたします。